

第16回 これからの学術情報システム構築検討委員会 議事要旨

1. 日時：平成29年1月30日（月）14：00～17：00

2. 場所：学術総合センター 20階 実習室1・2

3. 出席者：

（委員）

佐藤 義則	東北学院大学 文学部 教授
熊淵 智行	東京大学附属図書館 情報管理課長
甲斐 重武	京都大学附属図書館 事務部長
渡邊 俊彦	鹿児島大学 学術情報部長
山田 奈々	青森県立保健大学 図書課 主査
原 修	立教大学図書館 利用支援課 課長
近藤 茂生	立命館大学図書館 学術情報部 次長
呑海 沙織	筑波大学 図書館情報メディア系 教授
小山 憲司	中央大学 文学部 教授
大向 一輝	国立情報学研究所 コンテンツ科学系 准教授／学術基盤推進部 学術コンテンツ課 コンテンツシステム開発室長・図書室長
細川 聖二	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課長
吉田 幸苗	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 副課長

（陪席）

小野 亘	東京学芸大学 教育研究支援部 学術情報課長
佐藤 初美	筑波大学 学術情報部 アカデミックサポート課長
香川 朋子	お茶の水女子大学図書・情報課係員（情報基盤担当）
上野 友稔	電気通信大学 学術情報課 専門職員（学術情報サービス担当）
酒井 清彦	国立情報学研究所 学術基盤推進部 次長

（事務局）

上村 順一	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長（CiNii/新CAT担当）
阪口 幸治	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長（CAT/ILL担当）

古橋 英枝 国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課
学術コンテンツ整備チーム係員 (CAT/ILL 担当)

<配付資料>

委員名簿

1. 第 15 回これからの学術情報システム構築検討委員会議事要旨
- 2-1. 第 18 回図書館総合展 (フォーラム会場質問票)
- 2-2. 第 18 回図書館総合展 (フォーラムアンケート結果)
- 3-1-1. 電子リソースデータ共有作業部会 (平成 28 年度活動報告)
- 3-1-2. 電子リソース管理システムの利用可能性の検証について
(平成 28 年度最終報告)
- 3-1-3. Orbis Cascade Alliance 視察報告
- 3-2. 電子リソースデータ共有作業部会 (平成 29 年度活動計画) (案)
- 4-1-1. NACSIS-CAT 検討作業部会 (平成 28 年度活動報告)
- 4-1-2. NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について (NACSIS-CAT 詳細案)
- 4-2. NACSIS-CAT 検討作業部会 (平成 29 年度活動計画) (案)
- 5-1. 平成 28 年度これからの学術情報システム構築検討委員会活動報告
- 5-2. 平成 29 年度これからの学術情報システム構築検討委員会活動計画 (案)
- 5-3. 平成 29 年度これからの学術情報システム構築検討委員会委員 (案)

参考資料

1. 電子リソース管理業務の効率化に向けたシステム検証について (協力依頼)
2. 電子リソース管理システムの利用可能性の検証について (平成 28 年度中間報告)
3. Library Technology Reports. 2016, 52(6) Chapter6 (ERDB-JP 紹介箇所抜粋)

4. 議事:

(1) 前回 (第 15 回) 委員会の議事要旨確認

メール審議を経て 11/16 付で確定したため、委員会内での確認は割愛した。

(2) 第 18 回図書館総合展開催報告 (報告)

佐藤委員長より、資料 2-1 及び 2-2 のとおり、図書館総合展の開催結果が共有された。

(3) 電子リソースデータ共有作業部会の平成 28 年度活動報告と平成 29 年度活動計画について (審議)

小野電子リソースデータ共有作業部会主査から資料 3-1-1、3-1-2、3-2 に基づいて、今年度の活動報告と来年度の活動計画について説明があった。続いて、上野・香川電子リソースデータ共有作業部会委員より、Orbis Cascade Alliance における Alma/Primo の共同利用及びデータ共有状況に関する視察について、資料 3-1-3 に基づいて報告があった。

審議の結果、来年度の活動計画が承認された。

審議にあたって行われた質疑・意見交換は次のとおりである。

[資料 3-1-2 について]

- 子機関（各会員館）が親機関（コンソーシアム事務局等）から共有したデータを変更できなかったと記載されているが、親が 360RMC を契約し、それとは別に子が 360RM を契約した場合は可能なのではないか。
 - 親システムからデータを csv 等でエクスポートして子システムにインポートすれば可能だが、共有機能を使用して共有したデータが子が変更することはできない。
 - Alma ではその点が解消されるのか。
 - Alma には全世界の Alma ユーザーが共有する Community Zone とコンソーシアム内で共有する Network Zone と機関レベルの Institution Zone の 3 層があり、各機関は Network Zone のデータを「コピー」または「リンク」が可能である。「リンク」の場合には機関側で変更できないが「コピー」であれば変更可能である。検証で実装状況を確認する。
 - 360RMC で実現しなかった機能が Alma に実装されている可能性があるのであれば、検証内容として明記した方が優位性を示す材料になるのではないか。

[資料 3-2 について]

- 図の「書誌」とはどういう意味で使っているのか。
 - メタデータという意味で記載している。
 - この図では「タイトルリスト」との違いが分かりづらい。
 - 「タイトルリスト」は簡易な情報しか含まれないが、「書誌」は検索用のメタデータ、という意味で記載した。

[その他]

- 作業部会の検証報告書の背景には、図書館サービスのプラットフォームについて、各機関が使用している図書館システムも含めて見直す時期にきている、という前提があると理解している。その中のパーツとして ERDB-JP や 360RMC や Alma があるが、そのような文脈が抜け落ちて、断片的な情報が各機関に届いているとの印象を持っている。委員会として、両作業部会の検討結果の位置づけが明確になるような前提文書の作成が必要なのではないか。
 - 全体の方向性を示す文書と資料 3-1-3 の視察報告にあるような具体的な導入事例の両方がリンクすると各機関の理解もより一層進むのではないか。
- 検証結果が、商用 ERM システムと同等のシステムを独自構築するのがよいのか購入するのがよいのか、購入する場合には JUSTICE というまとまりで購入するのかよりミニマムなまとまりで購入するのか等々を検討する材料になればよいのではないか。
 - 来年度は検証後の方向性について明示した方がよいのではないか。
- 仮に共同購入を前提にすると、各機関における予算の課題もある。
- 日本で導入する、という仮定ではどういった作業が必要なのか、どの程度効率化する

るのか、といったことが検証結果として示されることを期待している。

- 現時点の作業部会の検証スコープは電子リソースの管理だが、検証を通じて、紙媒体も含めたワークフローの効率化を考える必要性を感じている。

(4) NACSIS-CAT/ILL の再構築の詳細案について（審議）

佐藤 NACSIS-CAT 検討作業部会主査より、資料 4-1-1～4-2 に基づいて今年度の活動報告と来年度の活動計画及び「NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について（NACSIS-CAT 詳細案）」について説明があった。

審議の結果、「NACSIS-CAT/ILL の軽量化・合理化について（NACSIS-CAT 詳細案）」については第 13 回推進会議で報告し、その後委員会 Web サイトに掲載するとともに、国公立大学図書館協会・協議会のメーリングリストでも広報することとなった。来年度活動計画についても承認され、説明会の具体的な実施方法について、作業部会で検討することとなった。

審議にあたって行われた質疑・意見交換は次のとおりである。

[資料 4-1-2 について]

- 用語の変更による混乱について検討はあったのか。
 - 「ファイル」や「レコード」について、一般的な意味と NACSIS-CAT 内での用法にずれが生じており、それを修正するための変更である。それぞれ 1 対 1 の対応での用語変更であり、それほど大きな混乱になるとは考えていない。
- 参照 MARC は今後も引続き必要なのか。
 - 書誌作成単位が異なる等の理由によりシステム登録できない外部機関作成データが存在する限り、流用登録が残り、参照 MARC の概念も残る。
- 「流用」という文言が残ることに違和感がある。従来の用語が残ると新旧で何が変わったのか分かりづらい。「コピー」程度に留めるのを検討してほしい。
 - 検討して修正する。
- 自動リンク機能は書誌作成時に必要なのか。リンクしていない状態でも、検索時に各データベースから抽出して表示させる、という方法はとれないのか。
 - リンクするタイミングや、登録後の検索時の工夫については検討の余地がある。
- 重複書誌データを統合する必要があるのか。
 - 詳細案の中で新たに「並立書誌」という語を用い、統合しない重複と、統合対象とする重複とを整理した。コピーしたかのように内容が全く同じ書誌が存在する意味は特にないという結論になり、統合対象とした。
- 著者名典拠の作成を任意にした経緯は何か。
 - 典拠データの作成業務を必須にすると業務軽減につながらないと判断した。
- 和漢古書等は VOL グループの繰り返しを許可するのはなぜか。VOL を繰り返さないと表現できない資料は存在するのか。
 - VOL を分割するメリットがないと判断した資料は許可したいと考えているが、詳細は来年度作成するガイドラインに向けて検討し、記載したい。

- 親書誌の作成とリンク作業が任意で残るということは、固有のタイトルという概念が残るといふことか。
 - ガイドラインの検討時に考えたい。
 - 外部機関作成データをそのまま登録した場合、由来ごとに TR が異なる可能性がある。それらの取扱いを今後詰めていく必要がある。
- 委員会として「統合的発見環境」というキーワードも出しているのに、「統合」というキーワードの使い方は再検討が必要ではないか。
 - 検討して修正する。

[詳細案の周知方法について]

- 今年度基本方針を通知したのと同様に、委員会 Web サイトに掲載して NACSIS-CAT 参加館及び国公立大学図書館協会・協議会のメーリングリストにメールを送信する方法でよいのではないか。
- 各地に出向いての説明会については誰に何を伝え、どういったフィードバックがほしいのか、という点を詰めた上でチャンネルを検討する必要がある。継続課題としたい。顔を合わせて意見交換を行うことは重要である。

(5) 委員会の平成 28 年度活動報告と平成 29 年度活動計画について（審議）

佐藤委員長より、資料 5-1～5-3 について説明があった。

審議の結果、活動報告と活動計画について承認された。次年度委員については異動等で交代があった場合は、交代する委員の役職の後任を 4 月時点の委員候補とすることとした。

(6) その他

事務局より、次年度委員長選出までは佐藤委員長が継続することについて提案があり、承認された。

以上